（別紙様式）

令和５年度　ICT 活用実践研究　実績報告書

所属校園	附属特別支援学校	形態 ※	☑ 個人　□団体・ｸﾞﾙｰﾌﾟ

	氏　　名	職名	備考（分担等）
研究代表者 （申請者）	西村　祐紀	教諭	責任者
研究分担者 （団体・ｸﾞﾙｰﾌﾟの場合）			
研究題目	タブレット端末を活用した特別支援学校の授業実践		

経　費　支　出　内　訳　*（事務の確認を経て提出のこと）*

事項	単価［円］	員数	金額［円］ （消費税込）	備考 （内訳・特記事項等）
〔設備備品費〕				
参考文献	2090円	1	2090円	Ipad×特別支援教育　学ぼう、遊ぼう、デジタルクリエーション
	2200円	1	2200円	今日から使える　特別支援ipad活用法
〔消耗品費〕				
Microsoft wireless Display adapter	7678円	3	23034円	
ACアダプターType-C急速充電器	1099円	3	3297円	
〔旅費〕				
〔人件費・謝金〕				
〔その他〕				
		合計	30621円	

【研究実績の概要，得られた成果・効果等】　*←以下に自由記載（報告書全体で４ページ程度に）*

１　研修概要、研究目的、研究方法など

特別支援学校学習指導要領では、「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」として、「各学校においては，児童又は生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を考慮し，言語能力，情報活用能力（情報モラルを含む。），問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう，各教科等の特質を生かし，教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。」としている。情報活用能力は、「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え，情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して，問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力」である。その情報活用能力の育成を図るため、「各学校において，コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え，これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。」とされている。

本校において１人１台端末の活用について、タブレットや PC そのもの自体の操作やアプリを使っての学習や余暇活動、写真撮影等については高い頻度で実施されている。しかし、それらを活用することに終始するあまり、タブレットや PC を使用すること自体が目的になっていることも多く感じられる。「特別支援教育における ICT の活用（文部科学省）」では、特別支援教育における ICT 活用の二つの視点として、

視点 1:教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするために ICT を活用する視点

視点 2:障がいによる学習上または生活上の困難さを改善・克服するために ICT を活用する視点

としている。ICT 機器を利用することが目的ではなく、何のために ICT 機器を活用するのか、児童生徒がどのような力を育成していくのかということをしっかりと踏まえて学習に取り組む必要がある。

本実践では、「タブレット端末を活用した特別支援学校の授業実践」として、特別支援学校において１人１台端末を活用した授業の実践を積み重ね、情報活用能力の育成、そのための１人１台端末の利活用、ICT 機器を活用した教育のさらなる充実を図ることを目的とする。

２　研究方法

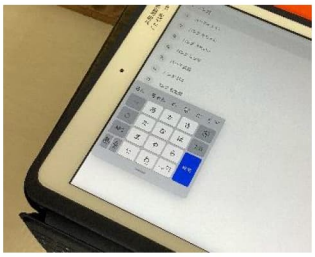
本校中学部での実践を行う。対象は中学部の指導の形態「認知・概念」（各教科等を合わせた指導）の学習の１グループの生徒６名とした。生徒の実態として、口頭での指示が通る生徒が多く、概ね言葉のやり取りを行うことができるが内容の理解度には差がある。タブレット端末の活用については、多くの生徒がスムーズに使うことができているが、文字入力については実態差がある。

タブレット端末の活用について、今回は Google アプリを使用した。Google アプリにはＡＲ（Augmented Reality・拡張現実）の機能が備え付けられており、そこにはいない動物や生き物などを目の前で見ることができる。この機能を活用して学習を進めた。

３　本研究の成果

単元は全４時間で行った。

（１）１時間目　タブレットを使って学ぼう



１時間目に文字入力の仕方や写真撮影、画面収録の機能、また Google アプリの使い方の説明を行って、実際にＡＲ体験を行った。文字入力については生徒の実態、またそれぞれの使いやすさがあるため、キーボード入力・ひらがな入力・フリック入力・音声入力を選択できるようにした。

実際にＡＲ体験を行った生徒からは、「先生見てみて！」や「そこにチーターがいるよ！」などという声がたくさん出ていたり、自分から積極的に文字入力をしたりして、様々な動物や恐竜などを出す姿が多数見られた。

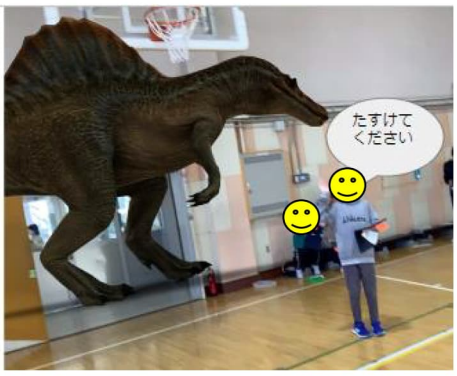
また、初めて操作する生徒にとってはわからないところもあったが、生徒同士で操作方法を教え合う姿も見られた。最後の感想では、「またやってみたい！」「次は違う動物でやってみたい！」などの意欲的な声が多く聞かれた。

（２）２・３時間目　友達と撮影しあおう

２・３時間目は、好きな動物や生き物と友達や先生と一緒に写っている写真を撮ることを目標に学習を行った。また、その動物や生き物と一緒に映ることで、どんな気持ちになっているのか、どんな表情やリアクションをしたらよいのかを考えることもねらいのひとつとした。

生徒たちは１時間目に学習した操作方法を使って、またフリック入力やローマ字入力、音声入力など自分のやりやすい方法で、思い思いの動物や生き物をＡＲで出して

いた。その中で、「先生ここに寝そべって」や、「〇〇さんここにしゃがんで」などと相手にお願いをして、それぞれが工夫をしながら写真撮影を行っていた。最後にGoogleフォームでふりかえりを行った。「次にやってみたいことはなんですか？」の質問に対して、半数の生徒が「もっとタブレットを使ってみたい」と「他の動物でもＡＲ撮影をやってみたい」という回答をし、他にも「もっといろんな人たちと撮影をしてみたい」という回答も複数見られた。



（３）４時間目　撮影した写真を紹介しよう

４時間目は、Googleスライドを活用し、これまで撮った写真を貼り付けて吹き出しをつけ、その写真に写っている人はどのような気持ちなのか、どのようなことを話していると思うかを考えてスライドを作成する活動を行った。Googleスライドでの編集作業は、「認知・概念」の他の単元等で学習済みであったため、生徒たちは比較的スムーズに作業に取り組むことができた。

自分で撮影したものに吹き出しをつける活動であったため、生徒たちは非常に意欲的に活動に取り組んでいた。操作がわからないところがあった際には、自分から教員に質問をしたり、友達同士で教え合ったりする姿も見られた。

前時同様、Googleフォームで感想を集約した。「タブレットを使った学習はわかりやすかったですか？」の質問に対してはすべての生徒が「はい」と回答していた。また、「今回の勉強でできるようになったことは何ですか？」の質問（選択肢を複数提示）に対して、「タブレットの使い方が上手になった」という意見と同等に、「相手の気持ちを考えて吹き出しをつけることができた」という回答も見られた。

４　まとめ

本実践では、「タブレット端末を活用した特別支援学校の授業実践」として、特別支援学校において１人１台端末を活用した授業の実践を積み重ね、今後の特別支援教育における情報活用能力の

育成、そのための１人１台端末の利活用、ICT 機器を活用した教育のさらなる充実を図ることを目的とした。単元の中で、「タブレットの基本的な操作や文字入力」について、また「タブレットでＡＲ撮影をする」ということができた。また、「場に応じた他者の気持ちや感情を理解する」こと、「場に応じた表現をしたり文字や言葉に表したりする」こと、「学んだことを生かして、自分なりに工夫して取り組んだり、自分のイメージしたものになるように試行錯誤して粘り強く取り組んだりする」ことなど、ICT 機器を活用して生徒に必要な資質・能力を身に付けることができるようにした。

生徒の感想にもあったように、ICT 機器は生徒がもっと使ってみたいと意欲をもって活動することができるツールである。そのツールを生かして、情報活用能力の育成、教科指導の効果を高めることなどを今後も継続していく必要性を感じた。ただし、ICT 機器はあくまでツールであり、ICT 機器ありきで学習を組み立てるのではなく、目的は生徒の資質・能力の向上であることを改めて再確認しながら、ICT 機器を活用していく必要がある。今後も実践を積み重ね、今後の特別支援教育における情報活用能力の育成、そのための１人１台端末の利活用、ICT 機器を活用した教育のさらなる充実を図っていきたい。

引用参考文献

・「特別支援学校教育要領学習指導要領解説　各教科編（小学部・中学部）」（文部科学省　平成３０年３月）
・特別支援教育におけるICTの活用について　（文部科学省　令和２年９月）
・海老沢 穣 著（2023）ipad×特別支援教育　学ぼう、遊ぼう、デジタルクリエーション（明治図書）
・内田 義人 著（2021）今日から使える　特別支援ipad活用法（合同出版）